認知症ケア学会・読売認知症ケア賞

じあった人
ケア学会
認知症ケア
の第10回
系国際フォ
年の取り
奨励賞に
選ばれた。

▽選考委員長＝本間昭（日本認知症ケア学会理事長）▽選考委員＝今井幸充（和光病院院長）、岩間伸之（大阪市大教授）、大谷るみ子（グループホームふぁみりえホーム長）、落合恵子（作家）、加藤伸司（東北福祉大教授）、中村祐（香川大教授）、山田律子（北海道医療大教授）、湯浅美千代（順天堂大教授）、阿部文彦（読売新聞東京本社社会保障部長）（敬称略）

主催・日本認知症ケア学会　特別後援・読売新聞社　後援・厚生労働省、東京都、全国社会福祉協議会、全国老人福祉施設協議会、全国老人保健施設協会、日本医師会、日本介護支援専門員協会、日本介護福祉士会、日本看護協会、日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士協会、日本認知症グループホーム協会、認知症の人と家族の会　協賛・エーザイ

家族を支援」初の試み

認知症ケアアドバイザー　五島シズさん　86（川崎市）

認知症の人の家族会で、在宅介護の悩み相談にのる五島さん（東京都小金井市で）

市）に転職し、認知症の専門家である長谷川和夫医師と出会い、認知症との長いかかわりが始まった。

認知症高齢者を家族が隠したがる時代で、参考資料も少ないなか、試行錯誤でケアの仕方を模索した。

米国の看護師が書いた論文を読み、高齢者が集まって若い頃の記憶を語り合うリハビリを始めたのもその一つ。「回想法」と呼ばれる療法で、脳に刺激を与え、心を安定させる効果があるとされ、今では介護施設などで広く実践されている。

83年に、大学病院で初の試みとして家族を支援するためにデイケアを始めた。

現在は、介護施設などの職員の指導や、全国での講演、家族会の訪問などを精力的に続けている。

受賞を受け、「好奇心が強く、新しいことをやるのが面白かっただけ。苦労もあったが、続けてこられたのは、周囲の協力あってこそ」と話している。

ないケア 構築

認知症の診療やケアに30年以上携わり、地域の連携体制の整備にも尽力してきた。

千葉県内で約20年前から、医

奨励賞

ョン病院院長
五さん 67
（千葉県松戸市）

て適切な治療やケアが切れ目なく提供されるよう、多くの関係者をつなぐ連携システムの構築に関わった。

また、東日本大震災後には岩手県陸前高田市などに入り、認知症の高齢者への支援活動を行った。現地の保健師らと協力し、仮設住宅を巡回。症状が悪化し

啓発10年 受診5倍に

NPO法人 中空知（なかそらち）・地域で認知症を支える会（北海道砂川市）

北海道の中央にある中空知圏は、旧産炭地を含む5市5町で構成され、高齢化率は34・5％と道内でも高い。10年前、高齢者の増加を背景に、地域の中核病院である砂川市立病院に「もの忘れ専門外来」が開設された。これを機に、「認知症の人への生活支援が必要」と、同院の内海久美子医師を中心に、医師や福祉関係者らで会を発足させた。

年1回、住民向けに認知症に関するフォーラムを開催。介護施設などのケアスタッフへの研修会や、介護施設などで現場の職員の苦労話などを聞く訪問座談会＝写真＝も行う。啓発のかいあって、認知症の疑いで同院を受診する患者は、この10年間で5倍に増えた。

内海医師は「高齢者がこの地域で生活してよかったと思えるよう、活動を発展させていきたい」と話している。

家庭的な共同住宅

NPO法人 老いと病（やま）いの文化研究所われもこう（熊本市）

認知症のお年寄りらが自宅に近い環境で最期まで暮らす共同住宅「ホームホスピス」＝写真＝を、熊本市内で運営している。大学の研究者や看護師、保健師らのグループだ。

地域の高齢者を支える実践的な研究を進め、2010年春に開設。空き家を活用し、家庭的な雰囲気にこだわる。

重い認知症や病気で、自宅や施設で暮らせない人たちを受け入れてきた。看護・介護の専門職スタッフが交代で常駐し、食事や入浴など生活を支える。昨年春に2軒目を開き、入居者は計11人。もう1か所も準備中だ。これまで5人の最期をみとったという。

代表の竹熊千晶・熊本保健科学大学教授(52)は「穏やかに終末期を過ごし、死を自然に受け止めてもらえるよう、共に歩んでいきたい」と話している。